スーパーロボット大戦OG 影に属するアホの子戦記

えーさく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スーパーロボット大戦ＯＧ　影に属するアホの子戦記

【Ｎコード】
Ｎ９３４７Ｙ

【作者名】
えーさく

【あらすじ】
システムＸＮの生んだ次元断層に巻き込まれ死んだ１人のヲタクは、神に転生を提案された。ヲタクは次元断層の先の世界を選択し、転生した。「極めて近く、そして限りなく遠い世界」そんな世界にやって来てしまった主人公の運命や如何に？※ストーリーを修正しました！

プロローグ

人生何が起こるかなんてわからない。
そう、わからないという絶望だらけ。
明日に希望も持てず、惰眠を貪る日々を送る。
某悪夢少佐みたいな人が居れば喜んで起き上がりますが……。

「これは夢だ……」

「残念ながら夢ではない」

呟く自分にそう言ったのは、悪夢少佐の上司。閣下だった。

「ジーク・ジオンッ！！」

「ジーク・ジオン！」

やったら応えてくれました。感動で死ねそう。

「さて、急で唐突だが、真実を述べれば、貴公は死んだ」

「そーなのかー」

うん。はい。死んだそうです。

確か今日はＤＶＤを返しに行って……

「所謂転生トラックに追突されて貴公は死んだ――――わけではない」

「あうぇ！？ならどーして？」

確かにトラックに追突された覚えはないけど……。

「実はな、次元断層に巻き込まれて死んだのだ」

「次元断層Σ！？」

まさか三次元リアルで次元断層なんて――

「げ、原因とか……何なんですか？」

「ふむ。システムＸＮの影響による次元断層が、貴公の前に現れたのだ」

そんなのアリ？

「本来なら死ぬべきでない貴公であった。故に貴公には転生してもらう」

死因はアレなのに、ちゃんと転生させてくれるの？

や、その前に――

「閣下は神様なのですか？」

「うむ。貴公のいうように儂は神だ。この姿は貴公との会話にあわせて用立てだものだ」

あぁ、そーなのですか。

でもいきなり転生なんていわれても――

あ。

「次元断層の先には、世界はあるのですか？閣下」

「ん？ああ、貴公の地球ではない地球がある」

「ならそこでお願いいたします」

「良いのか？」

「はい。それで構いません。あとはそちらにお任せします」

「そうか、だが良いのか？貴公自らが選んだ能力を付随することも出来るが」

「それは閣下のさじ加減にお任せします。それに、下手に欲張ってしまいそうですから」

「ふむ。委細承知した。貴公の次生に幸あらんことを祈る」

「ハッ！有り難き幸せ。御世話になります、閣下！」

敬礼を閣下に送ると、急に眠くなってきた。

ぅっ、か、っ、かの前、で、寝るわけ、には――

第1話　招かれた異邦人ーエトランゼー

極めて近く、そして限りなく遠い世界の地球。
異星人の襲来を退け、平和が続く世界に、１人の来訪者が訪れた。

「――き―ろ――お―きろ――」
「んむぅ……あと5分……」
「起きろ！！」

ゲシッ

「あうっ！！い、いったあ～い！！もう！！いったいなんなのさぁ！！」

僕は睡眠を邪魔されたことに腹を立てて、僕を叩き起こした人物に怒鳴った。

「それはこちらのセリフだ。いったいどうやってこの部屋に入った。どこの所属だ、貴様」

寝ぼけ眼が晴れて、僕の目の前には怖い目つきの赤い髪のおにーさんが拳銃を僕に向けていた。

はて？これいかに？

「聞こえなかったのか？所属と目的をさっさと吐け」

所属？目的？

え？このおにーさん、何を行ってるの？

てゆーか、僕は誰？

「目的？ん～～、わかんない。所属もなにも、僕は――ああ、太陽系第３惑星在住、きゃっ！！」

「ふざけていないでキリキリ吐け、俺もあまり堪え性のある方ではないからな、これがな」

ベッドに押し倒されて首筋にナイフを当てられた。ちなみに手足は長袖シャツで縛られてる。

――シュン

「アクセル、今日はブリーフィングがあるからって昨日言った…わ

……よ…ね……」

脇目で見ると、女の人が部屋の出入り口で固まっていた。

「あら、お邪魔だったようね。ヴィンデルには貴方は遅れるよう言っておくわ」

「待てレモン。侵入者だ、コイツは」

「あら、可愛らしい侵入者ちゃんね」

女の人が僕達の方にやってきた。

「初めまして、お嬢さん。私はレモン・ブロウニング、よろしくね。こっちのこわ〜いおに〜さんは、アクセル・アルマーよ」

「レモン…」

「いいじゃない。で、貴女の名前は？」

「えーっと……わかんない。うん。誰なんだろ？僕」

「記憶喪失？」

「わからん。ふざけているだけかもしれん」

「ふざけてないよ〜」
「貴様は黙っていろ」
「ぅぅっ」

このおにーさんは怖いよ……。

「そんなに睨んじゃダメよ、アクセル。一応検査その他諸々はコッチでやるから、貴方はブリーフィングに行って」
「わかった。だが――貴様、下手なマネはするなよ」
「……はぃ」

部屋を出て行くアクセル。

「さ、ついて来て」
「はぃ…」
「大丈夫よ。取って食いはしないから」
「うん」

僕はレモンのあとについて部屋を出た。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

普段ブリーフィングに遅れるなんてしないアクセルが珍しく遅れてたから様子を見に来たのだけれど、フフ、傍目から見たらアレはなかなかに危ない絵だったわね。

「レモーン、どこまで行くの～？」

「もう直ぐそこよ」

小さい子と話す機会なんて殆どないから、新鮮ね。

「さ、私のラボにようこそ」

「ほぇーー！すご～～～い！！」

フフフ、素直なイイ子なのね。

「さ、服を脱いでもらえる？これからいろいろ検査させてもらうから」

「はーい」

服というよりピッチリしたボディスーツのような物とマントを脱ぐ、というよりぽんぽん脱ぎ捨てるように脱いでいくあの子。

「男の子だったのね」

「ん？なに？レモン」

「なんでもないわ。それとこれから溶液を満たして検査するけれど、呼吸は出来るから」

Wシリーズの調整槽に彼を入らせ、酸素マスクをつけさせる。

あとは端末を操作して調整槽に溶液を満たしていく。

本当に素直でイイ子なのね。私の言ったことを正直に信じて、全く不安がらないもの。

「これは……」

興味本位で調べてみたけれど、スパイよりよっぽど厄介だわこの子。
とりあえずＤＮＡデータは部隊のＩＦＦに登録しておかないと、あの子達が侵入者と間違えるから。
それにしても、念動力者を手元に置けるのは嬉しい限りね。
となると、ヴィンデルにも言わなければならないわね。っと、その前にこの子に名前をつけてあげないと。

「奇遇……偶然……いえ、運命……フェイ…ト……フェイトにしましょ」

フェイト・ブロウニング。
そう呼びましょ。

「フェイト、もう終わったから、出ていいわ」
「フェイト？」
「そう、アナタの名前は今日からフェイトよ」
「フェイト……フェイト……僕が…フェイトか……」
あら、喜んでくれるかと思ったら、なんか考え込み始めちゃったわ。

「もしかして、フェイトはイヤだったかしら？」

「ううん。そんなことないよレモン。ありがとう」

直ぐ、直視するには無邪気で綺麗過ぎる笑顔を向けてくれたけれど、あの顔は、自分がその名前を名乗っていいのかどうか悩んで見えたわね。

本当の名前があるかどうかで悩んでいただけならいいのだけれど。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

フェイト・ブロウニング――

レモンが僕につけてくれた名前。

でもフェイトって聞いた時に、僕がこの名前を名乗っていいのかどうなのか、考えてしまった。

理由は僕がフェイトにそっくりだった。でも僕はフェイトとは全然違うから、その名前を名乗っていいのか悩んじゃった。

でもレモンが考えて、たまたま名前がフェイトになったんだったら、
まぁ、良いかな？って、思えたんだ。
それに嬉しかったし。

レモンはヴィンデルっていう人に報告があるからって、僕をアシェンに任せて行っちゃった。
アシェンはアンドロイドで、全身に武器がいっぱいついてるんだ！
ワイヤード・フィストもついてるんだって！
エステバリスだよ！スゴいよ！カッコいい！！
やぁ～、レモンは漢の浪漫がわかるくちだよ。
あとでバルディッシュ造ってもーらお！

「アシェン、次はどこ行くの？」
「ふむ。あらかたは見せてしまったからな……少し待て。レモン様――」
アシェンはアンドロイドだから通信だって出来るんだ。
レモンに言ってＫＯＳ－ＭＯＳ造って貰おうかな？

「――許可が降りた。格納庫に向かうぞ」

「はーい！……で、格納庫ってなに？」

「行けばわかる」

アシェンに手を引かれて、いくつもの角を曲がったり、扉を潜って着いた格納庫には――

「おお～～～～！！すっごぉーーーーいっ！！」

そこにはＭＳくらいのサイズのロボットが所狭し寿司詰めで並んでいた。

「ねーねーアシェン！アレってなんなの？」

「パーソナル・トルーパー――通称ＰＴと呼ばれる人型機動兵器だ。アレはそのＰＴの内の１機、量産型ゲシュペンストＭｋ－？。ＰＴの開祖とも言えるゲシュペンストＭｋ－？の直系の機体だ」

「へぇ……なんか強そう。こう、殴ったり蹴ったりとか強そうだね」

「確かに、ゲシュペンストは汎用機だが、そういう使い方もある」

「ふ～ん。ねぇ、あっちの灰色で背中にフライトユニットとビーム砲みたいなの積んでるヤツは？」

「アレはエルアインス。最新型の量産型ＰＴだ。分かり易く言ってしまえば、究極の汎用機だ。お前の言ったとおり、背中のツイン・ビームカノンによる遠距離から、手持ち火器による近～中距離戦闘をそつなくこなせる汎用機としては理想的な機体だ」

「成る程、特徴が無いのが特徴な機体なんだね」

「なんだそれは？」

「つまりバランスが取れ過ぎてて、あげるべき特徴がないって事さ」

「なるほど、確かにそういう意味では特徴はなくバランスは取れている機体がアレだ」

ゲシュペンストはちょいスマートなドムで、エルアインスはジム・カスタムとジム・キャノン？のハイブリッドな機体なんだね。

その他にもファンネルを積んでるアシュセイバーとか、変な形のリオンっていうＡＭも見せてもらったんだ。

で、気になるのが……。

「アシェン、アシェン、シミュレーターに乗りたい！！」

ここまで来てシミュレーターやらないヤツは男じゃないよ！

「少し待て。…レモン様――」

楽しみだなぁ……ワクワクするよ！

ビーッ！！ビーッ！！ビーッ！！ビーッ！！ビーッ！！ビーッ！！

ズドーーーンッ！！

『ＡＬＥＲＴ』『ＡＬＥＲＴ』『ＡＬＥＲＴ』『ＡＬＥＲＴ』『ＡＬＥＲＴ』『ＡＬＥＲＴ』『ＡＬＥＲＴ』『ＡＬＥＲＴ』

「わわわわ！？なに、なに、なにΣ！？」

「敵襲！？」

『総員第一戦闘配備！！繰り返す！総員第一戦闘配備！！』

『ＤＣ残党の襲撃を受けた！ＰＴ部隊、スクランブル！』

「アシェン！」

「来いフェイト！」

地響きと振動の中、アシェンの方に走る！

ピキーンッ！

「うっ！」

頭に強烈に『嫌な予感』がした。

するとアシェンが僕に駆け寄って来て、僕を押し倒した。あ、アシェンって少し胸控え目だけど結構あるし柔らかいし温かいんだ。アンドロイドとは思えないって――

僕が口を開こうとした瞬間。鼓膜が破れんばかりの轟音と眼を灼き尽くさんばかりの閃光と肌を焼かんばかりの熱風に襲われた――

第1話　招かれた異邦人ーエトランゼー（後書き）

とりあえず1話目です。

ちなみ外見がアホの子でありますが、中身はそれなりにしっかりしながらも素直で正直者で精神的に退化？してます。

よろしければ感想ください。

フェイト・ブロウニング（前書き）

我らがアホの子主人公、フェイト・ブロウニングの設定です。
一部修正しました。

フェイト・ブロウニング

フェイト・ブロウニング

所謂転生者で元自宅警備員。

フェイト・ブロウニングという名はレモンからつけてもらった。

容姿はリリなのの雷刃の襲撃者ーレヴィ・ザ・スラッシャーーそのままで、肉体に引っ張られるのか、時たまアホの子になる。性別は男の娘。しかしなのポをやっていないフェイトは雷刃の襲撃者を知らない為、自分を色違いフェイトだと思っている。

アホの子、素直過ぎる子ではあるが、中身がヲタクの為、突発的発想力や物事の見通しはそこらの科学者や指揮官より上。

不自然が起きないように、生前の自らの記憶、ＯＧシリーズ関係が一部ぽっかりなくなっている。しかし特定条件を経ると思い出される。ちなみに機体や技術関係は例外なのかしっかり覚えている。

パイロット能力

［格闘］：１３８

［射撃］：１２４

［命中］：１４５

［回避］：２１０

［防御］：９８

［技量］：１５５
［ＳＰ］：６４

性格：熱血

地形適応
空Ａ　陸Ａ　海Ｃ　宇Ａ

エース
移動力＋１、回避率＋１０％、クリティカル率１０％、格闘武装での与えるダメージ＋２０％

精神コマンド／直感、熱血、気迫、直撃、集中、魂

特殊技能
念動力Ｌ５、戦意高揚、アタッカー、見切り、インファイトＬ７、気力＋（回避）、気力限界突破、ＳＰ回復

第2話　極めて近く、そして限りなく遠い凶鳥（前書き）

少し加筆修正

第2話　極めて近く、そして限りなく遠い凶鳥

「いったたたた――」

どれくらい意識がなかったのか、頭がぐわんぐわんする。

怪我は……してないのかな？

って、そーだよ！！

「アシェン！」

僕を爆発から庇ってくれたアシェン。

爆発の衝撃でシステムダウンしてるのか、アシェンに動きはない。

「アシェン！アシェン！！」

「――ぅ――――く――」

「アシェン！！」

「――だい――じょう――ぶ――だ――」

眼を覚ましたアシェン。でもその顔は険しい。

「アシェン、なにがあったの？」

「わからん。だが、状況から見るに、この格納庫が攻撃されたのだろう。基地襲撃時は先ず敵の戦力を可能な限り潰すのがセオリーだ」

「なるほど……。アシェン、動ける？」

「問題ない。――と言いたいが、左脚のアクチュエーターに機能障害がある。おそらく爆発の影響だろう。無理をすれば動けるレベルだ」

「無理をすれば……ね」

「フェイトに怪我はないか？」

「うん。アシェンが守ってくれたからね！」

「そうか」

僕の答えにそう言ったアシェンは、腕を床について上半身を起こす。僕も起き上がって、マントについた埃を払う。

「うわぁ……ぐちゃぐちゃ」

「瓦礫の下敷きにならなかったのは幸いだったな」

僕がさっき見た格納庫とは１８０度様変わりでぐちゃぐちゃ。ＰＴも何機かしか生きていない。

「どうしよう、アシェン」

「……未だ戦闘は続いている。生身で行動するのは危険だ。ＰＴでここを脱出、本隊と合流する」

「らじゃー！」

「良い返事だ。待っていろフェイト、使える機体を探してくる」

「わかった」

片足を庇うように立ち上がったアシェンは、足を引きずりながらＰＴの方へ歩いていった。

「う～～～～ん」

特にやることもないから辺りを見回してみるけど、やっぱり今が戦闘中なんて実感が湧かない。

でも遠くだとまだ爆発音が聞こえる。

ピキーンッ！

「うっ、また……」

何故かわからないけど、何かに引き寄せられるように、僕は足を進めた。

瓦礫を乗り越えて進んだ先には、爆発してめちゃくちゃの格納庫の中にあっても、何者にも穢されないかのように佇む1機の黒いＰＴ。

「…ゲシュペンスト…じゃない。…ヒュッケバイン……違う、でも……」

ふと頭に浮かんだフレーズを勝手に口にしていた。

僕は迷わずＰＴに駆け寄った。装甲をよじ登ろうとすると、ＰＴが勝手に動いて、その手で僕を掴むと、コックピットまで上げてくれた。

僕がコックピットに飛び込むと、ハッチが閉まる。

暗くなったコックピットに薄暗く光りが灯る。

「どうしてだろ？触ったことないのに、動かし方がわかる」

半分勘に近い確信でボタンを押していく。

モニターにＳ－ＳＲＸと、表示された。

ピキーンッ！

「くぅっ！！」

いきなり頭痛がしたと思ったら、このＰＴの動かし方が少しずつわかっていく。まるで、情報をインストールされるように。

「なんだかよくわかんないけど、いくよ！ヒュッケバイン！！」

フェイトがヒュッケバインと呼んだＰＴのツインアイに光りが灯る。

フットペダルを踏み込み、機体の推力を上げてジャンプ。

「テスラ・ドライブも搭載されているのか……なら、飛べ！ヒュッケバイン！！」

黒煙を抜けた先は、戦場だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「くっ、よくもまぁこれだけの数を…」

愛機のアシュセイバーを駆りながら、アクセルはＤＣ部隊の兵力に顔をしかめる。

異星人との戦争後に決起したディバイン・クルセイダーズ――通称ＤＣ。

しかしその総帥、ビアン・ゾルダークは討たれて久しい。にも関わらず、未だＤＣは活動している。

しかしそこにはビアン・ゾルダークが掲げた意志や理想は無く、ただ戦うことだけを行う武力組織でしかない。

何故ＤＣ残党が未だに活動をしているのか、それは未だ副総帥が生きていて、地球の何処ぞに大規模な拠点を構えているのだろう。と言うのがヴィンデルの読みだ。

今回基地を襲ったＤＣ部隊も、その構成も数もしっかりしている。

連隊規模のリオンやランドリオンだけでも厄介だというのに、バレリオンも大隊規模で出張ってきている。

複数だがガーリオンとヘビィ・バレリオンも混じっている。

対するこちら側は、奇襲された上、格納庫もいくつか潰された為、量産型ゲシュペンストＭｋ－？、エルアインス、ランドグリーズ、量産型アシュセイバーが全機で約３０機。キルレシオ、技量、機体性能はこちら側にあるが、勢いと物量は向こうにある。

今は拮抗しているとはいえ、早く態勢を整えなければ、本気でこちらを潰しにかかっている連中に押される上、もたもたしていればヤツ等が此処にくる可能性もある。それはＤＣ以上に厄介だ。いや、厄介の範疇ではない。

「く、あまり時間はかけていられれん！ハルバート・ランチャー、発射！」

上空のリオン部隊へハルバート・ランチャーを撃つアクセル。

ビームは回避に鈍い４機のリオンを墜とすが、焼け石に水感が否めない。

「チッ、こうでは数が減らん」

再度ハルバート・ランチャーを撃とうとしたところで新しい熱源反応が出た。

破壊された格納庫から上がる黒煙から飛び出す１機の機体。

「あの機体は――誰だ、誰が乗っている！？」

シャドウミラーに配備されている唯一の特機にして鉄屑の機体。動力調整が極めて不安定な欠陥品で、今まで２、３度しか戦闘にしか出していない機体。

「Ｓ－ＳＲＸ！誰が乗っている。ＩＦＦ……フェイト・ブロウニング……さっきの餓鬼だと！？」

「我が名はフェイト！！フェイト・テス――あ、間違えた！っ、ゲフンッゲフンッ！――我が名はフェイト！！フェイト・ブロウニング！！我は、悪を断つ剣なり！！」

空中で直立腕組みで滞空し、オープンチャンネルと外部マイクでとてつもなく有名な見得をきる存在に、戦場の時間が止まる。

「アシェンを怪我させた悪者は、僕のヒュッケバインでバイーンってぶっ飛ばす！！」

Ｓ－ＳＲＸは加速し、右手に若葉色の光りを集中させる。

「あれは！」

アクセルは驚く。その現象を知っているからだ。

「破を念じて、刃と成れ――いっくぞぉ～！必殺ッ！！」

標的は固まる1機のリオン。

「Ｔ－ＬＩＮＫ・ブレードナッコォ！！」

左手から発したＴ－ＬＩＮＫブレードによって袈裟斬りから右斬り上げ、そこから念動フィールドを纏ったＴ－ＬＩＮＫ・ナックルでアッパー、機体制御を失い、落下するリオンにトドメの右ストレートでＴ－ＬＩＮＫ・ブレードを打ち込む！

「念動爆砕ッ！！」

フェイトの掛け声とＳ－ＳＲＸが拳を握ると共に文字通りリオンは爆砕した。

「はは！凄いぞ強いぞカッコイイ～！強くて凄くてカッコイイ！…そう、ボクってば最強だね！！」

準特機であるＳ－ＳＲＸを最危険ターゲットとみなしたのか、リオン部隊の大半がＳ－ＳＲＸに向かう。

「うわわわっ！！あ、危ないじゃないか！それにこういうヒーローとか新型が登場した時は、悪者は一方的にやられるのがじょーしきなんだぞ！！」

「（そんな常識があるか……）」

あまりのアホさ加減に呆れるアクセルだが、確かにＳ－ＳＲＸの登場で戦場の流れは変わったのは事実だ。

「こちらも、もたつくわけにはいかんな、こいつがな。行けぃ！ソードブレイカー！！」

「天上天下ァ！！念動破砕剣ッ！！」

ソードブレイカーによるオールレンジ攻撃と、Ｓ－ＳＲＸが投擲したＴ－ＬＩＮＫソードやエルアインスの活躍により、リオンはあらかた撃墜される。

「ガーリオンはこちらに任せろ。貴様は――」

「応！！狙うは、大将首！」

複数居るガーリオンに比べ、安全な長距離から攻撃するヘビィ・バレリオン。部隊の陣形から見ても、ヘビィ・バレリオンが大将首だ。

「ここ一番の取って置きの技でキメてやるぞ！！」

今まで以上に眩い若葉色の光りが、Ｓ－ＳＲＸに宿った。

「うわああぁぁぁぁっ！！」

雄叫びをあげるフェイト。

上昇するＳ－ＳＲＸ。

そしてヘビィ・バレリオンを斜め下に捉えた。

「窮極！！スーパー！イナズマ！キィィィック！！」

ブースト降下しながら、自重も攻撃力に転化する。念動フィールドを纏った脚は集中的に念動フィールドが収束し、眩い若葉色の輝きが見えているくらいにだ。

それは若葉色の帯を引く流星のような光景だった。

迎撃するヘビィ・バレリオンだが、そのレールガンの弾丸はＳ－Ｓ

ＲＸに届く事無くすべて弾かれていった。

直撃する鋼鉄の蹴り。

「うおおおおぉぉぉっ！！ブチ抜けええええーーーっ！！」

それは易々とヘビィ・バレリオンを一撃のもとに蹴り砕いた。

滑りながら着地するＳ－ＳＲＸ。

「どんな装甲だろうと――」

立ち上がり、再び直立し腕を組む。

「蹴り破るのみ！！」

背後でヘビィ・バレリオンが爆発し、後光を浴びてその存在を誇張し強調する凶鳥。その姿は、味方には鬼神、敵には死神に見えることだろう。

第2話　極めて近く、そして限りなく遠い凶鳥（後書き）

フェイト出撃の回。

アホっぽさを出すのって案外難しい。

第3話　アホの子とスバル（前書き）

大分修正を入れ、ガンダム成分を削ってみました。

第3話　アホの子とスバル

side：フェイト・ブロウニング

「知らない天井だ……」

僕は確か――

ヒュッケバインもどきに乗って戦ったんだ。でも戦闘のあとに気絶しちゃったんだっけ……。

とりあえずナースコールで起きたことを伝えて、いくつかの検査を受けさせられ、軽く疲れてベッドで横になってたら、病室にレモンが入ってきた。

「調子は良さそうね、フェイト」

「検査検査検査で疲れちゃったよ」

「必要なことよ。諦めなさい」

「むぅ～～～」

「フフ」

なんだか、レモンと喋っていると、お母さんって、感じるなぁ……。
当たり前か、Ｗシリーズの生みの親だし。
――あれ？Ｗシリーズって、なんだろ？
えーっと――
あーーーっ！！ダメダメ！断片的過ぎて何がなんだかさっぱりわからないよ！！
「どうしたのフェイト？」
「な、なんでもないよレモン。それより、ここは？医務室……の感じはしないけど」
「ここは基地から少し離れた病院よ。基地の方も少なくない被害を受けているから、こっちに受け入れてもらったの」
「そーなのかー」
ま、格納庫もボロボロだったんだから、基地機能の幾分かもやられちゃってもなっとくだね。うん。
「それより、アナタ、良くあのＳ－ＳＲＸを動かせたわね」
「うーん。なんとなく勢いに任せてやっちゃったけど、ヤバかった

かなぁ？」

「別に、それ程責めることはないわ。アナタのお掛けで助かったのは事実だもの。礼を言うわ、フェイト」

「えへへ～♪まぁ、僕にかかればチョロいチョロい！！さいきょーの僕に勝てるやつなんて居ないんだから！――一部例外アリ」

「フフフ、アナタは面白いわね、フェイト。それじゃあ、今日は安静に寝てなさいな」

「はーい」

レモンが出ていった病室はシン…と静まり返ってしまった。

「暇だ――」

何となく、自分の手を見てみた。

「人……殺しちゃったんだよね……ボク」

でも罪悪感の欠片も湧かない。戦いだからと割り切れたからか、それともまだこの状況を現実として認識出来てない――わけがないっか。

「念動力か……」

念動力の使い方を知っていた僕。普通に頭に、攻撃の流れがイメージ出来た。アレは――どうしてなんだろう。

――念動力。

それは強念者の素質を秘めた人間。強念者、サイコドライバーはアカシックレコードにアクセスする力がある……か。

流石にサイコドライバーなんて公式チートは備わってないと思うけど。

「念動……集中…」

戦いの最中で得た感覚をイメージして、手に力を込めてみる。

若干手の周りが揺らめく。しかし若葉色には輝かない。

「やっぱりＴ－ＬＩＮＫシステムの補助がないとダメか……」

運が良ければ帰れる可能性もあるし、『向こう側』に行ける要素も大きくなると思ったけど。次元の壁を操る資格は、今はないらしい。

「XNディメンジョン、次元斬――か」

手に集中した念動力をX状に交差させて払う。

「いつか、やってみたいなぁ……」

それが出来なければリュケイオスだけでの転移になる。僕というイレギュラーの介在で余計な事にならない為にも、バンプレイオスまでいかないにしてもXNディメンジョンは必要か――

「また……いったいなんなんだろう。バンプレイオスはわかるけど、リュケイオスがなんなのかわからない。あーーったく、イライラするぅ〜〜！！」

「なにやってるの、アナタは？」

「レ、レモン！？」

イライラして布団で悶々していたのをレモンに見られた。

ヤバ、すんごい恥ずかしい――

「どど、どーしたのレモン？忘れ物？」

「ええ、伝え忘れが一つね。アナタの処遇についてよ」

スルーという大人の対応に感謝しつつ、予想してた話題を出された。まぁ、緊急事態でも勝手にＰＴに乗っちゃったから、お咎めナシは――

「とりあえずは現状維持。しっかり療養しなさい。退院したあとに、ヴィンデル――ウチの部隊の指揮官に顔出しするから、頭に入れておいて」

「わかった」

意外に穏便な内容に内心ホッとする。

ヴィンデル――ヴィンデル・マウザー大佐。地球連邦軍特別任務実行部隊、通称シャドウミラー隊の隊長。

僕はどうなってるんだろ？

知らないはずの知識がふと頭に浮かぶのは少し混乱する。でも今はそんな不安なことも味方につけないと死ねる状況だ。

味方が……欲しいな。

色違い、性別違いのフェイト・テスタロッサ。ならなのはとかはやてとか居たらいいなって思う僕は、臆病者なんだろうか？

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

戦闘から４日目。

僕はようやく検査地獄から解放された。

「自由だあああぁぁぁぁーーー！！」

病院を出て叫んだ僕は悪く無いはず。

なにせ連日検査検査検査検査検査検査検査検査検査検査検査検査検査の連続で僕のＳＡＮ値は直送便代金着払いだよ。

「さて、迎えは」

確かレモンが来てくれるはず。レモンにはお世話になってばかりだね僕は。

「まぁ、知り合いはレモンとアシェンくらいだし！……言ってて寂しいやつだって今気づいた――」

……ｏｒｚ。

「えーっと、もしもし？大丈夫キミ？」

地面に手と膝をついて沈んでいる所に声をかけられた。

「大丈夫じゃないかも…今更友達少ないヤツって自覚して微妙に落ち込んでたりする…」

「そ、そうなんだ。で、でも元気だして！キミだったら友達なんて直ぐに出来るよ！」

励ましてくれる見ず知らずの人にお礼を言おうとして顔をあげてザ・ワールド！！

「あれ？もしかしてキミ、フェイト・ブロウニング君？」

「え、あ、うん。さいきょーの凶鳥乗りのフェイト・ブロウニングとは僕のことさ！」

とっさに切り返したからわけわかめな紹介をしちゃった。や、しょうがない……よね？

「あー、良かった見つかって。レモン主任に怒られずに済むよ」

「そ、そう。それで、キミは誰？」

「あ、忘れてた。えーっと、シャドウミラー隊技術部所属、スバル曹長であります！レモン・ブロウニング主任の代理として、フェイト・ブロウニング君をお迎えにあがりました！！」

ビシッと敬礼して僕に自己紹介をしたのは、間違いなく、ｓｔｓのスバル・ナカジマだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

スバルとの邂逅イベントを消化し、車で基地に向かっている僕ら。レモンは急の会議で来れず、多分アシェンは修理と調整があったから、技術部所属で歳の近いスバルにお鉢がまわってきたのかもしれない。

「それにしても、フェイト君はスゴいね。この間の戦闘記録を見たんだけど、アレはかっこよかったなぁー」

「えへへ、そっかな？でも僕はあの時無我夢中で必死だったから勢いに任せてやっただけだったから、本職のスバルにだって直ぐに出来ると思うよ？」

「そう、かなぁ…？」

苦笑いするスバル。でもその苦笑いには何か苦みとは違う感情が混じっているように僕には見えた。

しばらくして基地に着き、僕達はレモンのラボに向かった。

「失礼します。レモン・ブロウニング主任、フェイト・ブロウニング君を連れて参りました」

「ご苦労様。入っていいわよ」

「はい。失礼します」

ラボのドアが開き、中に入る。

「ご苦労様、スバル。それと退院おめでとう、フェイト」

「別に怪我とかはしてなかったけどね。ありがとう、レモン」

レモンに礼をしつつ、僕は気になっていた事を訊いた。

「…ねぇ、アシェンは、もう平気なの？」

「あの子なら既に任務中よ。アナタよりは元気よ」

とりあえずホッとした。Ｗシリーズのアシェンには要らない心配だろうけど、心配な物は心配だし。

「フェイト、退院早々悪いのだけれど、Ｓ－ＳＲＸのデータの吸い出しに協力してくれないかしら？システムロックがかかってアナタがアクセスしないとデータが開けないのよ」

「わかった。それくらいなら構わないよ」

多分Ｔ－ＬＩＮＫシステムが僕が乗った所為で、アジャストされてシステムロックが掛かっちゃったのかもしれない。僕なりの憶測でしかないけどね。

「ありがとうフェイト。私はあとで向かうから先に行ってて頂戴。スバル、フェイトを地下格納庫の第２ハンガーまで案内して」

「わかりました！」

僕はスバルに連れられて歩き、幾つかのエレベーターを使って地下に降りた。

格納庫はやっぱり肌寒い。とはいえ、僕の服は今の所フェイトの子供の頃のバリアジャケットだからなぁ。僕も身体は子供だから着てて違和感ないけど、やっぱり少し恥ずかしい。せめてｓｔｓのバリアジャケットならまだなんとか我慢出来るんだけど。

そう思いながらハンガーに固定されているヒュッケバインに目を向ける。ちゃんと見るけれど、外見はＭｋ－？に近いように見えるけど、全体的フォルムはどことなくＲ－１に見えなくもない。

ヒュッケバインを見たところでさらに隣りにあるゲシュペンストを見つけた。青いから量産型Ｍｋ－？なのかな？

「スバル、あのゲシュペンストは？」

「あ、アレ？あれは私の量産型ゲシュペンストＭｋ－？だよ」

スバルの機体だったんだ。なら腕のアレはプラズマ・ステーク仕様かな？

「ねぇスバル。ログ見てもいい？」

「ええ！？だ、ダメダメ！！恥ずかしくって見せられないよ！！」

なんか必死に拒否るスバル。今は無理に触れない方が良いかな。

「わ、わかったよ。見ないから落ち着いて」

「ほっ……」

肩の力を抜くスバル。そんなに嫌なのかな？

その後、やってきたレモンの言うことを、スバルの助けを借りながらシステムにアクセスしたりして、このヒュッケバインのマニュアルを貸して貰いながらそれを読みつつ、１日を過ごした。

ちなみに服はさすがに恥ずかしかったから、ｓｔｓのフェイトのバリアジャケットに、下にハーフパンツを履いた仕様に新調した。うん。見た目もカッコ良くなった！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：スバル

今私は、フェイト君の後ろを歩いていた。

私の存在意義上。護衛なら得意だ。

レモン主任から命令された今回の任務は、フェイト・ブロウニングの安全確保と身の回りの世話。

前者に自信はある。でないと私の存在意義の半分が無意味になる。もう半分は無意味に近いから、これだけは守らないと、私に存在する価値なんてない。

でも身の回りの世話は必要にないようにも見える。

フェイト君は見た目は私より年下に見える。でも時々私より年上何じゃないかと感じる時もある。特にＰＴ関連の見識や見解はレモン主任に近い物を私は感じた。

一度しか乗っていないＳ－ＳＲＸの事も私より詳しげに。

フェイト君は身動きは素人同然だけど、準特機のＳ－ＳＲＸを自分の手足のように動かしていた。

元々アレのテストパイロットだっただけに悔しく思うけど、人間じゃない私には限界なんだ。フェイト君はあの時の蹴りを私にも出来ると言っていたけれど、落ちこぼれで存在意義の半分が無意味の私には、フェイト君みたいになれない。

「どうかしたの？スバル」

「ううん。何でもないよ」

いけないいけない。任務中なのに気をそらしちゃ。
私は笑顔を作ってフェイト君に提案をした。

「そういえば、そろそろお昼だし、どこか食べていかない？美味しいお店紹介するよ？」

「ホント！？いこうよスバル！…あ、でも僕お金持ってない。……ハァ、また今度だね」

「大丈夫大丈夫！主任からお金貰ってるから」

「っしゃあああああーーーーー！！！！一意専心！征くはご飯屋さん！！者共続けぇぇぇっ！！」

喜怒哀楽が激しいね、フェイト君は。

「スバルー！早く早くぅ～！！」

フェイト・ブロウニングの護衛任務。
それが私に課せられた任務。
でも、今回の任務は楽しい任務になりそうかな？

「わかったから走らなくても大丈夫だってば！ご飯は逃げないからぁーー！！」
「甘いよスバル！！ご飯は減るものなんだよ！家庭の食卓はいつも油断を許さない戦場なんだよ！！」
「私達の行くのはお店だし、そんな直ぐにはなくならないよ！」
「美味しくない病院食生活からの解放ーーーーー！！」

フェイト君は時々わざとなのか素なのかわからないボケをかますみたい。

ボケ対応のソフト、今度レモン主任に頼もうかな？

第3話　アホの子とスバル（後書き）

意見や感想をよろしくお願いします。

第４話　アホの子とヴィンデル・マウザー（前書き）

ヴィンデルとの顔合わせです。ホントにそれだけ

第４話　アホの子とヴィンデル・マウザー

ｓｉｄｅ：フェイト・ブロウニング

今僕は１人の人と話していた。

「初めまして、と言うべきか。本当ならばもう少し早く顔を合わせて礼を言いたかったのだが、本拠地を攻撃されたとあって時間が取れなかったのでな。私はヴィンデル・マウザー。シャドウミラーの総指揮を執っている。先の戦闘での援護には感謝する」

「いいえ、僕は生きる為に行動したまでですから」

「しかし誰にでも出来るわけではない。君のお陰で被害も減ったのも事実だ。それは誇っても良いことだ」

「そ、そうですか……」

ヴィンデル・マウザー大佐。シャドウミラーの指揮官。

少し威圧感が喋りにくい。値踏みされてるみたいで。

「さて、突然で悪いのだが、我々の部隊は特殊部隊の都合上決して多くの隊員を保有しているわけではない。機動兵器のパイロットはよりその傾向にある。君も見ただろうが、先の戦闘で少なくない被

害を受け、猫の手も借りたい程なのだ。もうある程度予想はついているだろうが、私は言葉にして頼もう。君の力を暫し我々に貸してはくれないか？」

ヴィンデル・マウザー大佐からの協力要請はある程度予想は出来てた。や、誘われなかったら申し出る気でもいた。少なくとも、僕は行き場所がないんだから。

「わかりました。僕はもとより行く宛てがなかったので、その申し出は有り難いくらいです」

「そうか、感謝する。フェイト……ブロウニング。ようこそシャドウミラーへ。我々は君を歓迎する」

その後、ヴィンデル大佐と処遇について細かな内容を決めた。とはいえ、衣食住と身分の保証と、配属先についてだけど。

「成る程、わかった。データと身分については確約しよう。試験部隊についても隊員候補の資料を届けさせよう。ＤＣ部隊を退けてくれた礼とでも思ってくれ」

「ありがとうございます。ヴィンデル大佐」

意外とすんなり要望が通ったことに安堵する。

「…本当ならもう少し君の世界について聞いてみたかったが、時間が来てしまったようだ。また後日呼び出すかもしれんが」

「構いません。私達をご理解頂く上で必要なことでしょうから」

「うむ。ではまた後日に頼む」

「はい。失礼します」

踵を返し、ドアが開いて出ようとした所に声をかけられた。

「君は、この世界をどう思うかね？」

一概には難しい質問だと思った。

「……各地で散発的な小競り合いはありましょうが、基本的には平和に思えます。でもその平和はヴィンデル大佐ら軍人が維持しているからこそ続いているものと思います」

でも中にはどうしようもない、私利私欲の為に肥成す軍人もいるだろうし、平和ボケや認識の甘さもある。慢心とかね。

「今の平和が何時まで続くかわかりませんが、私もその平和を維持する為ならば、微力ながらお手伝いします」

「……そうか。引き止めてすまなかった」

「いいえ。では、失礼します」

僕は一礼してから部屋を出た。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ｓｉｄｅ：ヴィンデル・マウザー

静かになった執務室で、ヴィンデルはフェイトについて資料を片手に思案していた。

突然現れた謎の少年にして念動力者。
報告はアクセルやレモンから聞いていたが、実際に会ってみてやりにくい相手と言うのが第一印象だった。

見た目にこだわって話していると大人のように痛い所を突いてくる。
子供の皮を被った大人として扱っても、こちらの考えを読み込まれているかのように感じる人物だと。しかし弱点は素直過ぎて嘘を言えない点だと言うことか。しかし子供のような素直さを大人の思考で言うものだから、やはりヴィンデルはフェイトが苦手と思った。

最後の質問の返答も、口に言うのは別に顔と眼でも語っていた。
軍の腐敗を良しとせずだが、平和であるのならば、それを維持する為なら戦う。フェイトの言いたいことは夢想事だが、あの眼は本気であり、彼にはそれを成せるだろう力。念動力がある。
伊豆のハガネ隊に行かせるよりかは、多少危険だが手元に置いておきたいというのも、ヴィンデルの素直な思いだった。彼には人を引きつける物があるとヴィンデルは見抜いていた。

「しばらくは、レモンの下で様子を見る他はないか……」

ヴィンデルは手元にある資料を見る。
それは先程フェイトが持参した資料。
タイトルは――
旧式化が進むゲシュペンストとそのパイロットの救済処置。
ハロウィン・プラン――
ゲシュペンストシリーズの強化改造プランであるこのプランは、現場には堅実で安定性のあるゲシュペンスト系の機体を好む者もおり、系列機の運用継続を望む声が上がっている。
確かにゲシュペンストシリーズは発展性も優秀で、エルアインスの

登場により旧式化は否めないが、柔いエルアインスよりも格闘戦に十分耐えうる装甲強度を持つゲシュペンストはベテランから新人にまで未だに好まれる傑作機である。

多額の資金を投入して新型機を量産配備するよりも、初期量産機の近代化改修と延命措置による旧式機のマイナーチェンジにより、安く高性能機を揃え且つ乗り慣れた機体のまま戦えるという、現場にも財布にも優しいプランである。

只でさえ、ベテランのゲシュペンストと新人のエルアインスではキルレシオに大差が付き、場合によっては最新機のエルアインスが相手にならないポテンシャルを秘めた機体だけに、このプランは恐ろしい価値がある。しかもそれを見た目１０代に満たない子供が考えたとあれば尚更だ。

フェイトはこれを試金石と言って渡して来たが、いざ箱を開けてみればとんでもない代物に、ヴィンデルは薄ら寒い物を感じた。

だがシャドウミラーの勢力拡大とゲシュペンストを主力に使っているだけに戦力向上にも十二分に役に立つ物だ。

「お前が何を目指し、何を考えているのか、不明瞭な点は多いが、使わせて貰おうフェイト・ブロウニング」

ヴィンデルの声は静かに執務室に響いた。

第４話　アホの子とヴィンデル・マウザー（後書き）

あちら側にはハロウィン・プランがないのだろうと思い、ちょうど良いと思ってフェイトにハロウィン・プランを提出させてみました。

理由はゲシュペンストが主力のシャドウミラーの戦力向上とフェイトの利用価値の確立だったりします。

意見や感想なりなんだり、バンバン送ってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9347y/

スーパーロボット大戦OG 影に属するアホの子戦記

2011年12月10日01時49分発行